実践報告

特別支援学校中学部生徒に対する
他者からのはたらきかけへの反応を
引き出すコミュニケーション支援

児童の実態

・中学部生徒　急性脳症後遺症
　　座位保持装置付き車椅子使用

・座位保持装置付き車椅子における座位姿勢時，
頭部は脱力すると右側に倒れる。
軽度の側彎（右凸），
ATNR(非対称性緊張性頸反射※）あり。
※原始反射の１つ。顔が横に向くことで体が非対象になる。本生徒の場合は不随意的に顔が右に強く向く時，右の手足がのび，左の手足はまがることが多い。

指導目標

【令和2年度後期指導目標】

話しかけた人の方に顔や視線を
向けることができる。

支援の工夫

・運動機能の制約が大きい生徒は，ことばだけでなくさまざまな表出行動の発達が遅れたり弱かったり，見逃されたりする。前言語的行動（視線，表情の変化，発声など）は「ことばの前のことば」ともいわれる。これらがより**意図的**になるようにかかわり方の工夫が必要。

↓

・本生徒が好きな言葉を話しかけたり，呼びかけが単調にならないように間を置いたりして関心を持続させる。
→実施場所の音（声）の響きが反応に影響するかどうかを検証して，より反応を引き出せるように努める。

・刺激が過度になり不快な環境になることを避ける。
→体を動かしやすい環境を整え，実施する時の体調や，実施回数を配慮し不快な場面にならないようにする。

指導場面･般化場面

【指導場面】
下校前のデイサービスの待ち時間
（座位保持装置付き車椅子座位姿勢・テーブルなし）

【般化場面】
授業中，話しかけた人の方に顔や視線を向けることができる。

手続き

- 休憩時間等で，車椅子座位姿勢になっている時に実施する。
- 力が入って両腕がピンと伸びている時は両腕を屈曲し，背もたれ側に両肩がつくよう誘導して，力を抜くよう促す。
- 左右から話しかけ，動きを待つ。
- 向くことが難しい時は，肩や首の位置を確認し姿勢を整えたり，視界に入ってから話しかけ追視できるよう促したりして，向きやすいよう支援する。
- 話しかけられた方に顔や視線を向けることができたら称賛する。
- 実施日において，話しかけた人の方に顔や視線を向けることが左右２回以上できたら達成とする。

記録方法

生徒の行動を得点化し記録をとる。

※顔を向ける→ヘッドレストに耳が隠れるぐらい

３点：顔を向ける

(左右それぞれの方向から話しかける)

２点：顔を向ける

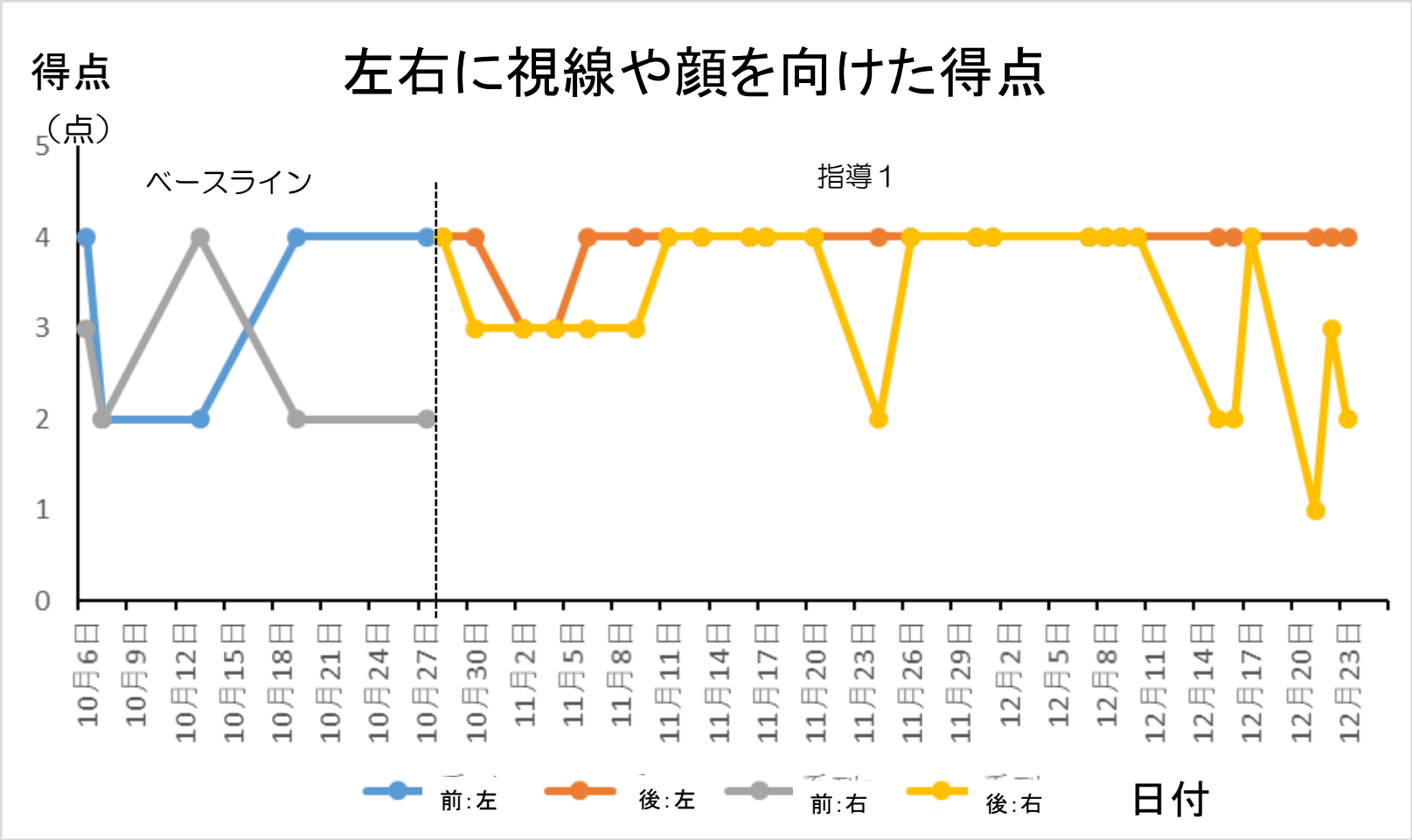
（視界に入った後，追視の方法で促す支援あり）

１点：視線のみ

０点：視線なし　もしくは

ATNR(非対称性緊張性頸反射)

結果（1）


得点
左右に視線や顔を向けた得点
（点）
5
4
3
2
1
0
ベースライン
指導１
10月6日
10月9日
10月12日
10月15日
10月18日
10月21日
10月24日
10月27日
10月30日
11月2日
11月5日
11月8日
11月11日
11月14日
11月17日
11月20日
11月23日
11月26日
11月29日
12月2日
12月5日
12月8日
12月11日
12月14日
12月17日
12月20日
12月23日
前:左
後:左
前:右
後:右
日付

結果（2）　～エピソード記録含む～

・車椅子の調整（10/27点線部分）後，頭部をヘッドレストでしっかり支持できるようになり，首を動かしやすくなった。
（⇒修理は今後予定）

・起立保持具（プロンボード）で立位姿勢保持を１日１０分程度実施(9/28～)。頭部を上げる様子が多く見られた。

・追視の支援ありの声かけ（視覚と聴覚の刺激）に応じて，視線や顔を向けることが増えた。
（※声かけに飽きる場面も見られたが，人が通るだけで見ることも増える。）

結果（3）　～エピソード記録含む～

・声かけは教室よりホールの方がよく響き反応がいいが，笑いすぎると力が入って背中をそるため向きにくい。教室で短い言葉の声かけにする方が，向きやすい時もあった。
・痰などが多く表情もよくない日は反応が乏しい。
　⇒中止した日あり。体調が良いと左右，
　　場所の差が少なく，できることが多い。
・右側へ強く顔を向けるような緊張が多い日は右への意図的な動きが難しい。

結果から推測されること

①本人の良好な体調（痰や緊張が少ない）

②体が動かしやすい状態

（車椅子が体に合っている，体を動かす機会がある，医療的なサポートがある）

③日々の声かけやかかわり

（刺激⇔反応の機会がある）

以上の条件がそろうことが多ければ多いほど，
本人が学習する機会が増える。

◎ 学習したからといって今後ずっとできるとは限らないが，この条件が揃うように努める事が必要。

コミュニケーション力の向上による効果と課題

・生きること（健康の維持）につながる
（コミュニケーションによる発声，深い呼吸，顔周辺の動きにより嚥下機能等の維持）

・コミュニケーション力の向上には豊かに生きることを支援する医療や看護に基づく生活支援が不可欠である。⇒学校で，できることは何か。

参考文献・・・重症心身障害児（者）のケアアドバンス

目標や方法，評価の課題

・右に向くことを促すことは原始反射を誘発する場合があるが，原始反射の抑制を優先しすぎると，自由な動きや学習活動に制限を加えることになる。
・緊張による拘縮や変形を予防するための適度な運動は必要と考え，また本人の現在の状態から実施できると判断して取り組んでいる。

目標や方法，評価の課題

◎体を動かしやすい条件を知る

⇒きめ細やかなアセスメントが必要。

（チルト，リクライニングの角度，テーブルの有無による影響※も考慮する）

※テーブルを使用した状態であれば，肘をつくことで上体が安定し，顔を向けやすいと考えられるため。

⇒他に体へのアプローチの仕方があるか検討する。

◎動作以外の評価の仕方を知る

⇒体温・心拍数・視線の動きなどの小さな変化等

本生徒にとってより有効な方法を，専門家（PT等）や他の教員と連携しながら考え，改善していきたい。